

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎

フランス文学学者
柏木 隆雄

送った返事は、それこそ恋文そのままで、実に長かった。

それをたまたま漱石の家に入つた泥棒が尻ふき紙に使って、なんとした手紙が延々と伸びていたといふ。巻紙なればこそその話で、馬琴も何度も張り継いだ書簡がたくさんあり、その精力と徹底的な生真面目さ、誠実さに驚嘆してしまう。

久足の鋭い眼力を馬琴がたちまち認めたことが、このわずか一行で知られるが、この年の馬琴の日記には、2月の欄に久足の訪問が詳しく述べられている。例えば、

一八日 同刻、小津新蔵来ル。例の如(ごとく)長談、夕七半時帰去。
廿一(21)日 いせ人小津新蔵
来ル。かけ合いの昼飯供の小もの
へも振舞。昼後、そば切りふる舞
煎茶・菓子等少々出之(これに出す
す)。(略) 夕七半時比帰去。是迄
迄(これまで)しばしば終口長坐
ちようぎにて、殆及難儀(ほど

長尻に閉口しつつも
久足の眼力に感心

馬琴から巻紙の手紙

令和の世で、手紙を書くのに、
紙を使う人は希少だが、右手に筆
を執つてさらさらと、長さに応じ
て、巻紙をくるくる左手で伸ばしな
がら書き、筆を置くところで紙を
断つ。これなら長短自在、巻紙が尽
きれば、次の紙を張り継ぐと、何の
問題も無く、さらに書き続けられ

明治大正の小説家童話作家の鈴木三重吉（1882～1936年）は、夏目漱石の講義に出て心酔するが、在学中にノイローゼにかかり、故郷広島で静養中に漱石から励ましの手紙をもらつて発奮意氣揚々と上京する。彼が漱石に

2月19日。馬琴がいちいち出版済みの書目や出版予定の本を、篠齋に題名を挙げて説明する中に「同年に出た「侠客（きょうかく）伝」（南朝の遺臣に義侠の男たちが絡んで、楠正成のひ孫姑摩（こまき姫）を援助する読本（よみほん）の傑作。岩波新日本古典文学大系第87巻で読める）に及んで、その刊本を手にしたばかりの久足が、印刷された本文に余計な一文字があると「はや小津氏披見出候（みいだされそうろう）」と、馬琴は篠齋に報

七日 ろ、い 略(宗伯) 対面。」
外は雑小の飯振舞。(略) 後1時4時ごと
で。則一二

也。(略) 七月
宗伯(略) 略
對面。 飯振舞

今朝四時比（午前11時）
セ松坂旅人小津新蔵来ル。
於客坐敷予井（ならび）ニ
そはくハ馬琴の長男も
談数刻、蒲焼とりよせ、昼
之（これにふるまつ）。供の

(今日が最後だということで、相応にもてなしひまあけたり(やつといとまを告げた)。(馬琴「日記」第3巻、中央公論社、1973年)

綱の内側が川口駅前、日記の横に
変わらずの久足訪問にうんざりし
ている記事は2月21日。翻刻が間
違いでなければ、この間の馬琴の
久足の印象の変化はなかなか興
味深いものがある。

(每週土曜掲載)



岩波書店「新日本古典文学大系」第87巻「絵

柏木隆雄さん 76 歳歿
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎
⑧

フランス文学者

柏木 隆雄

曲亭馬琴の書簡を年代順に読んでいくと、彼が折々に何に関心を持ち、どんなことを話題にしたか、どんな人間と付き合い、同居の家族とどのように接しているかまで、細かに知ることができる。もちろん書簡の多くが、火事で焼けたり、もらった者やその家族、子孫が表具の裏紙に使ったり、紛失などして、今は残らなかつたものもたくさんあるが、ありがたいことに殿村篠斎宛てと小津久足宛ての手紙は「馬琴書翰(しょかん)集成」(八木書店)全7巻中の大半を占めて、私たちはそれをつぶさに読むことができる。

実はバルザックも100編に近い作品を夜を徹して執筆し、かつての手紙は「馬琴書翰(しょかん)集成」(八木書店)全7巻中の大半を占めて、私たちはそれをつぶさに読むことができる。

バルザックと馬琴の筆記をさせたりはしたが、大体において彼らは人の手を借りずに、ひたすらペンを、あるいは筆を振るつた。

さて篠斎、久足宛ての書簡を年次に従つて読んでいくと、馬琴自身の2人に対する姿勢や評価が、

日々を通じてみると、毎々の手紙に費やす語の膨大さに驚くほかない。馬琴は小説執筆のために参考にする書物に目を通して、時にはその文章を自ら写し、また日記もきちようめんに記す。そして肝心の著作、それも一度に何編かを並行して書いていくのだから、その筆力、精力に驚嘆してしまう。今なお馬琴の全著作が翻刻刊行されていないのも、あまりにその量が多いからだろう。

バルザックと馬琴 手紙の多さなど共通

篠斎、久足宛て書簡膨大

交際15年の間細かい活字で4巻本となるほどの恋文を送り、それと別に出版社や友人に書き送った書簡が5巻もあるから、まさしく馬琴とバルザックとは、東西文筆の雄と称して間違はない。

バルザックも年下の友人に口述筆記させたこともあり、馬琴も長男そして彼の死後はその嫁に原稿を譲り、馬琴の書簡をさせたりはしたが、大体において彼らは人の手を借りずに、ひたすらペンを、あるいは筆を振るつた。

さて篠斎、久足宛ての書簡を年次に従つて読んでいくと、馬琴自身の2人に対する姿勢や評価が、

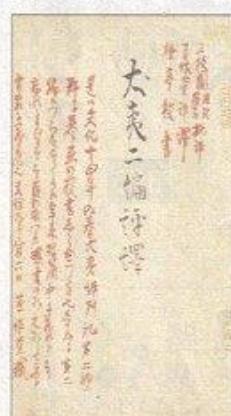
現存の篠斎宛ての手紙は、もつとも古い日付の物でも、すでにお互いを知り尽くした感じで、馬琴も馬琴の言葉ある言葉遣いも面白い。

ただ記されるに過ぎない。

正直に言えば、馬琴が友人たちへと手紙を往復する真の意味合いは、次作への評判を聞くことがあり、この点ではファンレターを待つ一般的の流行作家と異ならず、馬

琴の書簡を持つけるのは学問的裏付けへの執念と精査で、篠斎、久足との長く変わらぬ交際が続くのも、この2点が大きな要因であることは間違いない。知り合った当初の久足は、単なる自作の購読者として扱っていることが馬琴の手紙の書きぶりで分かる。それがやがて変化を見せてくる。

(毎週土曜掲載)



「馬琴評答集」第1巻 (早稲田大学出版部、1988年) 口絵、琴魚稿「犬夷評判記」

【柏木隆雄さん(78)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手
ク著「バルザック詳説」、「暗黒事件」など。
ボーランド貴族ハンスカ夫人による

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

88

フランス文學者

柏木降雄

「犬夷（けんい）評判記」は文政元年（1818）の刊行で、24歳の青年小津久足が初めて江戸の馬琴宅を訪ねたのは、その10年後の文政11（1828）年の末。おそらく本居門の先輩殿村兄弟らの刊本は、彼らからよく聞かされ、また熱心に読みもしただろう。数度の無駄足の末やつと馬琴との面会を許された久足は、彼ら兄弟の消息や八犬伝の感想、質問など一気に話したに違いない。それでも足らず、以後江戸に出張の折には必ず馬琴を訪（おとな）い、長い時間を過ごしたことは、馬琴の折々の日記で知られる。

この間、馬琴と松阪の篠齋との手紙も重ねられていて、久足が面

親しく付き合い、常久没後1年の天保2年（1831）、「里見八犬伝」第8輯（しゅう）上帙（じょうちつ）に、八犬士の名前を読み込んだ常久の和歌八首を巻頭に掲げるとともに、その追悼文まで載せたのだろう。

誠に真政から文化文政という19世紀前半における本居、殿村、小津の各家に代表される松阪商人の知的レベルの高さと文化的意義の重要さは、後世の私たちの想像以上のものがある。このことは大いに

店中の欠足宛ての第1は
年(1829)2月10日付
書き1通で、新刊の馬琴著
『美少年録』の代金「金一分(い
ト銀二匁(にもんめ)」を、
立て替えたという証しとし
て、郷を告げに訪れた日に記し
か1行の書き付けだ。

青年久足、馬琴を訪う

小津新蔵ぬし、早春度々ご訪問の
處(ところ)、前便得貴意候如く(前
便であなたの許しを得たように)
早春多務ニ付。不得挂面候処(対面
できず)におりましたが、此節(こ
のせつ)ハ少々俗用も片付候折か
ら、昨十日(きのう)來訪、近々御帰郷の上
し一付、則対面、雑談及數刻ニ候。
と説明し、刷り上がりたばかりの
彼の別の書簡を「外へハ見せがな
く候へども、貴兄ご懇友と申事故
(もつすことゆえ)、昨今の面調(めん
づけ)ニは候へ共、これ又貸進み
いたし候。

「慰みもの」の代金を使用人の前で云々（うんぬん）するのは、はばかられるので立て替えると著者本人の前で言つたとあるのは、いかにも世慣れぬ若い大店（おおだな）の店主の言葉で、「金は自由になる身だから」と立て替えを申し出るやや反り身の久足青年と、おそらくは苦笑いするしかない馬琴の様子が浮かび上がつてくる。



八木書店刊
「馬琴書翰集成内容見本」
部分(2002年)

【柏木隆雄さん
78 略歴】

柏木隆雄さん(78)略歴

—

1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

フランス文学者

柏木 隆雄

並べた書簡と、それに対する作者の返答などがまとめてある。

「ひこう」、「よみ本好キ」
訓詁の「説釈記」の体裁

ては、飯時をも忘れるそれがし。
（略）幸いなるかな。彼（か）の作者
に由縁（ゆかり）ある都の金魚子
も参宮がてら四五日前より当所に
逗留（とうりゅう）。

評 金槌（かなまり）八郎（主君の息女伏姫を犬の八房（やつるぎ）ともども銃で撃った若侍）。里見義実（よしさね）に邂逅（かいこう）。

の足のことく、安房国を領せし神
余氏は、かなまりゝ唱えたり。(略)
金椀は神余(かなまりゝかなあま
り)の仮字也、和名鈔(わみようし
ょう)。

など、樂屋落ちの紹介に笑わされ
るが、「ひいき」や「よみ本好き」た
ちの勝手な放言を「頭取」が訳知
り顔にまとめる役者や遊女・戯作

神余（しんよ）の一族なる由
れど。その事定かならず。（略）その
家系などをも。詳しく言わせたき
もの也（なり）。

と篠斎が歴史的、系譜的知識をもとに、登場人物の命名の不備を問うのに対して

折り合ひが馬鹿になつたが爲めに
屈せず、博引傍詆、理が彼にあること
を、立て板に水のように書き記す。

答 神余金槌の一氏（ふたうじ）
異なることなし。むかし安西馬呂
(あんざいまろ)らと鼎足（ていそく）
く=今

斎の指摘を受けて、再考しつつそれを粉碎していく馬琴は、自分の作意を知る読者を得て、得難い友と思つたに違ひない。

「八犬伝」、疑問と作者回答

連の女中」といつた人々の会話文は、当時流行した評判記そのままに、例えば

殿村篠斎の義弟、操亭琴魚(れきてい・きんぎょ)が編集した「犬夷(けんい)評判記」(1818年)は、彼の序文に「南總里見八犬伝(初編1814年)、「朝夷(あさひな)巡島紀(しまめぐりのき)(初編1815年)」は、いずれも立派な作品ながら、第2編が出て以降未刊のままだ。作者は病氣とと言うが、「待ちわひしきをいかがはせむ。いでやこの書をあらはざば。作者を励ますためにもならん。(略)いらざる世話も数寄(すき)の道」(松阪市史「第7巻、430頁」とあるように、好評「八犬伝」休載中に馬琴の著作に対する篠斎の疑問を

ひいき 当所三四庵のあるじは、かの作者と曰識（昔からの知り合い）なるよし。（あまりに本が出ないので）、江戸の便りを聞かまほしさに。わざわざ出かけて参つたが、貴公は外（ほか）にござ要あつてか。読みほん好キ イヤ拙者 読本（よみほん）好キ とてもい同前。よみ本を見かかつ



犬夷評判
記前表

每週土壤指標

【柏木隆雄さん】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

(86)

フランス文学者

柏木 隆雄

が、自作の批評や批判に極めて敏
感な馬琴の彼への关心と興味をそ
そり、そこから確固とした友情を得
て、彼の義弟守親が馬琴に親近
し、読本作家への手ほどきまで得
られるようになったのだろう。現存する馬琴書簡の篠齋関係の
物で最も古い文化14年(1817)
3月14日付櫻亭琴魚宛ての書簡
はその一つの表れた。

京の店や松坂で病弱の身を養い
つつ読本(よみほん)作者を志し
た松坂商人櫻亭琴魚(れきてい・
きんぎよ)が、弟子を嚴しく拒んだ馬琴の例外的な厚遇を
得たのは、もちろん彼の才能や知識、人柄もあるが何よりも義兄
殿村安守(とむら やすもり)との縁が大きかったのではないか。

安永8年(1779)生まれの篠齋は琴魚とは9歳年長で、馬琴の訪問は琴魚のそれに先立つ1年前の文化4年(1807)。以後頻繁に書簡をやり取りする中で、愛読する彼の著作についての細かな感想や質問を書き送ったこと



櫻亭琴魚の墓碑。「櫻亭道香居士」とある。日野町の願證寺で

説を、かくまでに見る人稀なるべし。わがための知音「自分の心をよく知った友人」、この上やあると、じつにかたち「その人に対する姿勢や態度」を改めるまで甘服(感心)つかまつり候。(『馬琴書翰集成』第1巻、八木書店、2002.19.)。表記は読みよいように改めた。)

篠齋の自作への批評を読んでの馬琴の感想は、それを紹介した琴魚への言葉であるだけに、社交上に候えば、開封(してそのまま再三熟読、誠にもつて甘心)へなるほどと納得)、大悦たどこの事に御座

へというよりは、戯作者を志す琴魚への好意だろう。「こはぐ」れば、草紙(本)にしてもらいたいと望む。この馬琴の意向が翌年の「犬夷(けんい)評判記」の刊行につながることになった。

馬琴の厚遇を受けた琴魚

の誇張は多少あるにせよ、自己の制作意図を知つてもらえた著者としての喜びが素直に出て、文字通り知己を得た喜びにあふれている。そして自分が腹案として持つて、これを「三枝園(篠齋の別号)弁」を添えたとして、この手紙文とは別に長い自作の説明文を書いた。手紙の末尾に、篠齋の批評文は返さなくてもよいとしながら、「あ

まりの面白さ、興に乗じて蛇足の弁」を添えたとして、この手紙文とほ別に長い自作の説明文を書いた。手紙刊行の度に篠齋が送つた質問に、馬琴が答えた書簡を、琴魚が編集首尾を調えて刊行したのが「犬夷評判記」である。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(78略歴)
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳による『暗黒事件』など。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

フランス文学者
柏木 隆雄

琴日記録〔しょう〕によつたとい
う。大正12年（1923）の関東大
震災で東京帝大図書館が焼け、馬
琴日記の大部分が焼失した。昭和
48年（1973）中央公論社刊行
の「馬琴日記」全6巻は、簗村編「日
記録」のほか、他の所に残っていた
り、新たに発見された日記を集め
たものだ。

馬琴
40歳前後の頃
篠齋、琴魚が訪問

大震災の6年前に書かれた一戯
作三昧は、天保2年（1831）
いかにも著述一筋で、気難い、そ
して孤独な64歳の老作家馬琴を活

芥川龍之介の一越作三昧（はさくさんまい）（1917年）に、曲亭馬琴が午前11時頃朝湯に出掛けた「松の湯」で、相客から執筆中の「里見八犬伝」をべた褒めされ、うれしいような、苦いような複雑な思いをする所がある。その時、他の客が式亭三馬や十辻香一九の戯作を持ち上げて、あからさまに彼を貶（おとし）めるのを無視して湯から上がり、帰宿後反論せずに終わつた自分を責める。

馬琴の矜持（きょうじ）と自省、さらに創作に没頭する高揚感が、そのまま芥川自身を写すのは、友人への手紙で知られるが、馬琴の日常は、妻庭草村（あそばこうそく）（1855～1920年）編『愚

「南總里見八犬伝第九輯結句
編下巻五十三」本文引用個所
(神戸女子大学吉水文庫蔵)

戯作者仲間との親近を好みぬるかに遠い知己はある意味まことに心強い味方となつたはずだ。まして戯作者としての馬琴の名前を慕つて（あるいは利用しようとして）彼に弟子入りを志願する者も多かつたようだが、彼はそれらを厳しく退けた。

ところが篠齋の義弟琴魚については彼の死まで弟子として認め評価を惜しまないでいたことは

「櫻亭琴魚は同じからず」

写するが、殿村修造（じょうぞう）とその義弟である櫻亭琴魚（れきとうきんぎょ）が、それぞれ江戸の馬琴宅を訪れた時、馬琴は40歳前後。作家としての名声が確立する途上で、客は20代後半、財もあり、深い文学教養も備えており、彼らの自作に対する好意は有難かつたに違いない。また遠来の伊勢松坂のファンというのも、馬琴が心を許す要素だったかも知れない。しかも彼らは江戸の店へ口を置いて定期的にやってくるのだ。

「里見八犬伝」最終巻の彼自身の「に徵する」とができる。

「八犬伝」完結に当たって、馬琴は「後書き」に替えて、「回外剩筆（じょうひつ、本編以外の余分な文の意）」を添えた。文化11年（1814）起稿する直前の馬琴を訪れた架空の諸国修業の僧が、馬琴が筆を終えた天保12年（1841）、先の約束通り再訪、小説の作意構想を問う形を取る。

「八犬伝」執筆の後半に明を失つた馬琴に代わって、長男の未亡人

路（みち）に筆を取らせたことば
関して代筆してくれる弟子はない
なかつたのかとの僧の問ひに、自分
は昔から門人はない、と明言し
て、文化・文政の頃（1820年代、
馬琴まさしく40代）は、文才がある
と自負する青年たちが、紹介者を
介して弟子志願する者など8、9
人いたが、「吾（われ）一人も是（こ
れ）を許さず」と書く。
それでも是非に、と馬琴の話を
聞きに来る中で、行いの正しい者

にはまあ「琴」の字を勝手に使うのは許さうともうと仰うど、5、6名をうした者がいた。ただ彼らが今はどうなつたか、生きているかどうかも分からぬ」と記した後で、

松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

⑧

フランス文学者

柏木 隆雄

父や叔父と共に本居春庭に入門した小津久足と同様に、曲亭馬琴に久足を紹介した殿村安守、号篠斎（じょうさい、1779～1847年）も、父祖の代から本居門に入つて、宣長没後はその長男春庭を後見して、師の遺著「古事記伝」を出版に心を碎いた。和歌をたしなみ、国学ものぞきながら、当時人気の洒落（しやれ）本、読本（よみほん）にも目を通す。彼もまた久足と興を同じくする風流人で、往時の松阪の豪商は、京、大阪、あるいは江戸に店を構えて、当主は本家に住まい、財力・知力に心して余裕ある時間を趣味に没頭して店主の威



殿村兄（右）、弟（左）
（柳川重信の篠斎）
「大夷評判記」
「大夷評判記」
の挿絵

よいよその本領を發揮していた。面会を許された篠斎は、刊行されても間もない馬琴の力作について熱く語つたに違いない。馬琴は自分よりちょうどひと回り下の篠斎に心を許すと

を示したようだ。
その篠斎が日頃愛読している馬琴を江戸に訪問したのは文化4年（1807）4月1日という（松阪市史「第7巻、岡本勝「大夷評判記」解説）。篠斎28歳、馬琴は40歳。3年前に「月水奇縁」を出して読本作者として確固たる地位を得た馬琴は、この年正月「椿説（ちんせつ）」と「張月」前編全6巻を出版、い

ころがあつたのか、以後篠斎68歳の死に至るまで、江戸と松阪、さらに天保6（1835）年篠斎が和歌山に退隱して後も、そして5年後再び松阪に帰還してからもう一人の交友はほぼ40年にわたつた。交わりの深さは江戸、松阪を往

馬琴と3人の松阪商人

馬琴の「琴」もらい

松阪で読本を書く

してその子孫が、馬琴の書簡を大切に扱つたかが、それで知れよう。

馬琴が松阪市日野町の加藤弥右衛門の娘といと結婚するのは、文政10年（1827）の正月。久足24歳の時だが、その結婚の仲人が、ほかならぬ殿村守親すなわち篠斎の義弟で読本作者櫻亭琴魚だった（小泉祐次編「小津久足略年譜」、「鈴屋玄蕃」第5号）。殿村安守、守親兄弟と小津久足との深い親交を証して余りある。

小津久足が松阪市日野町の加藤弥右衛門の娘といと結婚するのには、ほかならぬ殿村守親すなわち篠斎の義弟で読本作者櫻亭琴魚だった（小泉祐次編「小津久足略年譜」、「鈴屋玄蕃」第5号）。殿村安守、守親兄弟と小津久足との深い親交を証して余りある。

篠斎の妻の弟とされる殿村守親（1788～1821年）が、篠斎に次ぐ全6巻の大部分が篠斎と久足宛ての手紙であることを思えば、馬琴がいかに長文を松阪の友人たちに書いていたかが分かる。もちろんそれらは馬琴が書いた手紙の全部ではない。あるいは散逸したり、紙が貴重な時代にあって、襷（ふすま）やびょうぶなどの下張りになつて反故（ほこ）となつているのは、弟子を取らぬと公言

【柏木隆雄さん（78略歴）
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大阪府立大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」翻訳に「バ

ック著「暗黒事件」など。
（柳川重信の篠斎）
「大夷評判記」
「大夷評判記」
の挿絵

（毎週土曜掲載）

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

フランス文学者 柏木 隆雄

る。依之（いのち）
談数刻、此筆
殆（ほんと）
（「馬琴日記」
1973年）

る。依之（これによつて）対面。雜談數刻、此節（このせつ）多務中、殆（ほとんど）迷惑、ようやく歸去（「馬琴日記」第1巻、中央公論社、1973年）

げ来たのを含めると、都合6回となり、相手の馬琴が久足の相変わらずの長つ尻に閉口している様子が彼の日記に見える。

例えば13日の項には、

この著作を同時進行で執筆して、また家計のやりくりにも奔走して、た馬琴として無理もない。それでも一応の誠意を尽くしてもなのは、日記にも記すように、旧知の

た。16歳で本家を継いで安守と改名、本居宣長の門に入つたのもその頃になる。晩年の宣長(65歳)からその才知を認められ、重宝されたという。

久足の長尻、馬琴も迷惑

小津久足が江戸の人気戯作者曲亭馬琴の知遇を得ることになったのは、松阪の豪商殿村佐五平（後に安守）号篠斎（じょうさい、1779～1847年）の紹介による。小畠祐次「小津久足（桂窓）略年譜稿」の文政11年（1828）の項に「十二月四日 久足 殿村佐五平の紹介にて、初めて馬琴の宅を尋ねる」とある。

実際、当年61歳の馬琴が残した克明な日記にも、

いせ松坂市人大津（馬琴の聞き間違いか、書き間違いか？）といふ者、殿村佐五平紹介のよし二て來

それから5年を経た天保3年（1832）2月にも、4日、7日、13日、18日、21日と馬琴宅を訪れるようやく3月4日松阪に帰る。

紹介者の殿村安守
阪商人の大物



常念寺にある
殿村一族の墓
(安守本人の
墓はすでに
ない) = 中町で

(さんしえん)を尊んだのも当然だ
（毎週十睡掲載）

市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳によるバルザック著『暗黒事件』」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎

フランス文学者 柏木 隆雄

そのときも隆ク

へ足
跡の
出で
て順
も學
精ひ

31歳の紀行文「花鳥日記」以
て、關達（かつたつ）な文体を生
んだと思われるが、それに加
えて、家業湯浅屋の江戸店（だな）
調に發展していることも、彼
問への自信を裏付け、余裕あ
る神活動を支えたに違いない。

足31歳の紀行文「花鳥日記」以降、闘達（かつたつ）な文体を生み出したと思われるが、それに加えて家業湯浅屋の江戸店（だんなてや）も順調に発展していることも、彼の学問への自信を裏付け、余裕ある精神活動を支えたに違いない。

没した。文化元年（1804）生まれの久足とは37歳の年長となる。知恵伊豆として知られる松平信綱の4男が分家する時、その郎党として付けられた曾祖父の後、祖父を継いで家督を受けた馬琴の長兄が主家への不満から退転、次兄も他家に養子に入つて、幼い馬琴が十歳で一家を背負う形になるが、小姓として侍した主人の息

年後商家の入り婿となつて独立。一時は商売や大家（おおや）業で生計を立てたが、のち滝沢姓に属つて著作に没頭した。ちょうど日本で生まれた文化元年、馬琴は詩本での処女作「月水（げつびよう）奇縁」を出版し、本格的な読本作者の道を踏み出している。

（一七九九年以後山東）
なり、馬琴は
から刊行を始
んせつゆみは
年の「三七年」
ぜんでんな
発表、読本作
位を占める。
その最もす

評判になつたものは、
佐佐の「忠臣水滸伝」
が読本後期の画期と
文化4年(1807)
始める「権説官張角(ち
はりつき)」、さらに翌
年「雲南柯夢(さんしち
んかのゆめ)」を次々と
者として確固たる地

曲亭馬琴の知遇を得て

馬琴23歳の寛政2年（1790）
子への腹立ちから浪人して他家を
転々とした。

どの中国小説の趣向を借りて、日本在来の題材を勸善懲惡、因果報の理念で統括し、それを和漢混報の理念で統括し、それを和漢混

9輯上、中、下がある中、その下に
45番費やし(天保13年(1842))
3月、最後の5曲で完結した全9

〇)、当時の戯作者のトップ山東
伝(1761)
1810

京 16
交文でつづつしていく著作を書う
その最初に成功したものは建部足
足(たけべあやたり、1719)

輯106冊に及ぶ文字通り畢生
(ひっせい)の大作「南總里見八大
伝」である。(毎週十曜掲載)

年)宅に寄合

八 食
74年の「一本朝水滸伝」前後全25巻
(前編のみ1772年に出版、後編は雪本で云わるが未元で、續足)

【柏木隆雄さん(78)略歴】
1944(昭和19)年、松阪

The image shows the front cover of a book titled 'Kansei'. The cover is decorated with a blue and white patterned paper, possibly a Japanese design. A woman in traditional courtly attire is depicted in the center. The title 'Kansei' is written vertically along the right edge of the cover.

書は「水滸伝」の名を借りながら必ずしもそれに従わず、奈良朝、鎌倉時代の物語や和氣清麻呂などが活躍する実混交の物語だ。

市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

小津久足の文雅の業を追つて、
彼が年少より師事した鈴屋学から、30歳に及んでその紀行日記に、
本居流の国学や、師春庭が心血を
注いだ語學書への辛辣(しんらつ)
な批判に至るのを見た。それはなぜか。
久足の和歌や紀行の著作、さら
に「家の昔がたり」「桂窓一家言」
などを見ていく過程で、不正を許
さぬ彼の潔癖な姿勢、広範な読書
範囲、和歌への傾倒、先学貞原益軒
の紀行文の愛読、細密な読書と実
地踏査による宣長国学への疑義
商人として細かな制約を好みぬ独立不羈(ふき)とも言える気性が

しかしそれの事曲以上に久正を鼓舞したのに、当時「読本（よみほん）」というジャンルで巨匠として知られた曲亭馬琴の知遇を得たことがあろう。好学の文人馬琴と親しく書簡をやり取りする中で、自らの知識を忌憚（きたん）なく披瀝（ひれき）できるとは、全く足にとってその自信を深めるのにつきく作用したはずだ。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

フランス文学者

柏木 隆雄

し」(第7条)と書くように、個人は他人が矯正する」とはできない、と久足は悟っていたようだ。第11条「活花(いけばな)も投げ入れは自然にてよし」にもその主張が示されている。

それは当然語法に及んで、「てにをはは音曲の調子の」として自然のものにして、合つが定理、違つたが)うが理外也(りがいなり)。それを様々の書(一字虫食い)こしらえて、てにはを論ずること愚のいたり也(第20条)と規則に

久足の歌論「桂窓一家言」全27条の第1条で言う「歌は自然を第一とす」の「自然」は、もちろん現代で「しじん」と読む川草木の現象を言うのではなく、文學通り「おのづから然(しか)る」の意で、巧みを弄(ろう)せず、心の赴くままに発せられる言葉を尊重することを言つだらう。久足はあるいは「じねん」と發音したかも知れない。

第4条に「ただわが性を性として、他にかかわらずに詠むがよし」と記すのも、「自然」の意を明らかにする。そして「」の生まれ来て持ちたる性は、どうも直りがた

に及ばず、「あゆひ抄」「かざし抄」(いずれも1778年、1767年の富士谷成章著書)「詞の八衝」必ず見るべき書にはあらず」(第37条)と先師たちの国語研究を批判する。

第59条には古学や大和魂、直口靈(なおびのみたま)などを「こしらえて、上古にかえさんとするは笑うべし」と「班鳩日記」での

歌は自然を第一とす

国学批判を繰り返し、第62条では

「詞の玉の緒」で、「変格」とてには違ひと立てたるは「これわたくし也」と勝手に文法を定めた、と宣長を批判する。

が第111条にある。

さらに第32条「今の世に第一の山師のようなもの

「詞のやちまた」などなべて(總じて)歌を難するやから多し。はたらきは、てにはとは違いて、あとよりの作りものにて、もとより

創作と批評との深い溝。「そんな理屈を言う前に、立派な作品を作つて見せてみろ!」とうそふく作家と、「氣楽で主観的な創作と違つて、理論は客觀的眞実を知性で裏付けるものだ!」と反論する批評家の間に、それは常に横たわっている。



「桂窓一家言」表紙
(小津陽一氏蔵)

【柏木隆雄さん(78)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

以下、「本居風の道は仮りにも尊ぶべからず、作りものにて、世に言ふ山師に似たり」(第95条)とか、「本居風の追々におどろふからかい、「詞の玉の緒」は言ふるは、この教えあまり誇張過ぎ、

思したる「元来備わつた」ものならねば、違うが定理也。そのことわり「理屈」を知らずして、歌を難するその人のうたは、難する歌の半分にも出来ぬこと笑うべし。

松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安二郎

(78)

フランス文学者

柏木 隆雄

師本居春庭の著「詞(ことば)の八衢(やちまた)」(1808年)に対し、「常に忌み嫌うこと甚だしくから来るのか。」と記す「斑鳩日記」(1836年)における小津久足の激しい批判はどこから来るのか。

春庭は「詞の八衢」序文で、言葉の働きは実に不可思議で、使い方によつて意味も違つてくると言つて、そこで言葉全体を統一する語の「活(はたらき)」を強調して、その「活」の根本となる動詞の活用を初めて四つに大別して表で示した。

春庭の積年の努力の結晶である「詞の通路(かよいじ)」(1829)

フランス文学者 柏木 隆雄

小津安二郎

(78)

フランス文学者

柏木 隆雄

(78)

フランス文学者

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安三郎

フランス文学者

柏木 隆雄

77

51歳の父徒好（ともよし）、18歳の叔父理修（まさのり）と共に、小津久足が14歳で本居宣長の長男春庭の門に入った時、師春庭（当時54歳）は、すでに失明して20年以上、「詞（ことば）の八衢（やちま）」刊行後10年余り、古学や歌道を教える傍ら「詞の通路」の著述に没頭していた。

小津家を擧げての本居学への親

くることにも表れている。

春庭が65歳で亡くなつた文政11年（1828）は久足25歳。19歳で湯浅屋の家督を継いだ翌年、宣長を慕つて松阪を訪れた平田篤胤を、先輩たちと応接するほどに鈴屋門下で重きをなすに至つた彼は、春庭の遺児有郷の後見人となつて、以後毎年春庭追慕の歌会に出席、それは死に至るまで欠かすことなく、「最後の歌会の10日足らず」後に55歳で死んだ（足立巻一「やちまた」下、中公文庫、427頁）。

歌会への律儀さは、師への個人的思いもあろうが、なによりも

物のみによって考察する「宣長の姿勢」に向け始めた疑いの目（菱岡壽司「大才子小津久足」中公叢書、89頁）は、やがて本居学そのものから離反へとつながっていく。

一つにはこれも菱岡氏が指摘するように（同書86頁）、宣長の正統を継ぐとする和歌山本居家の総帥

市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「翻訳によるバルザック著『暗黒事件』など。

本居大平の実力、とりわけ久足が力を入れる歌道において、才能の

卓越を認めなかつたことにも起因するかもしない。

春庭の死を告げる平田篤胤への私信に「大平と春庭とが入れ替わつていればいい」などの不穏な文

言を書くところに、大平への不信

が見える。それが大平一門の奉じた可能性は確かにある。

さらに「柳桜日記」から3年後

の「花染日記」（天保2年、1831）に示されるように、「延喜式

しかし春庭の死の半年前に記した「柳桜日記」に、実地を見ず「書

たしなみを誇りとする小津久足

と、厳格で規範を求める熱心な学者春庭との相違が横たわっているように思われる。

春庭の「詞の八衢」「詞の通路」2著とともに古語での動詞活用とそれに付随する助動詞・助詞に係わる規則性を追求して精緻を極める。それは生きた言葉をあまりに機械的に規則に絡めることにもなる。自由な作歌を重んじる風流人久足はそれを嫌つたのではない。

（毎週土曜掲載）

「柳桜日記」

で宣長批判

が記す各地に祭られる神社などの名称、由来、その位置について、久足自身が縦密に精査した結果を踏まえての宣長古学への再検討と誤謬（ごびゆう）の発見を経て、はつきりと「大和魂」への反感を自己確認するに至る。それが宣長の長男である師春庭の著「詞の八衢」に対して、自分は「仮にも信じることなく、常に忌み嫌うこと甚だ

しく」と書く「斑鳩日記」（天保7年、1830）における激越な批判の言葉へとつながっていく。

この嫌悪はどこから来るのか。

そこに和歌を作ることを生涯の樂しみとし、「風流人」として文雅の言葉を書くところに、大平への不信

が見えた。それが大平一門の奉じたしなみを誇りとする小津久足

と、厳格で規範を求める熱心な学者春庭との相違が横たわっているように思われる。

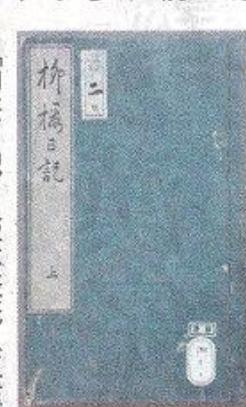
春庭の「詞の八衢」「詞の通路」2著とともに古語での動詞活用とそれに付随する助動詞・助詞に係わる規則性を追求して精緻を極める。それは生きた言葉をあまりに機械的に規則に絡めることにもなる。自由な作歌を重んじる風流人久足はそれを嫌つたのではない。

（毎週土曜掲載）

前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「翻訳によるバルザック著『暗黒事件』など。

【柏木隆雄さん（78略歴）】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「翻訳によるバルザック著『暗黒事件』など。

【柳桜日記】 版本表紙（三重県立図書館蔵）



松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎

(76) フランス文学者

柏木 隆雄

小津久足31歳の紀行文「花鳥日記」(天保5年(1834))が、彼の従前の紀行文とは異なる印象は、どこから来るのだろう。一つには菱岡憲司氏が「小津久足『花鳥日記』について・付翻刻」(2009年刊「文献探求」47頁)で指摘するように、本居学からの解説があるのかもしれない。

「花鳥日記」、石山寺参詣のくだりで、

まず(石山寺の)本堂を拝み奉るに、おのれ常に觀世音菩薩を深く念じ奉れば、いと尊くなむ(實に尊いものだ)。さるは(そうであるのは)、おのれ(私が)やまと



「班鳩日記」版
本表紙(三重県立図書館蔵)

魂とかいふ無益のかたくな心(意)固地な気持ち)は、さすがに離れたれば也(なり)。(同11頁)表記は読みやすいように改めた)

とある文章は、その前段、水口宿にある八幡宮の庭に彼岸桜ばかり50本も植えてあるのが「今をさかりなれば、ことのほかなる見ものなり」と記している数行と相呼応して、本居宣長が自画像にも添えている有名な自讀の歌、

敷島のやまと心をひと問はば 朝日に匂ふ山桜花

を自ずから想起させつつ、あたかも宣長の「朝日に匂ふ山桜」に逆らうかのように、久足がおそらく放があるのかもしれない。

「花鳥日記」、石山寺参詣のくだりで、

と褒めて、本居學徒のよどびろとする「敷島のやまと心」を、「無益のかたくな心」ときつぱりと断じて、その呪縛から離れたことを「さすがに」という言葉で感慨深げに自ら納得するのだ。

「さすがに」の用法は、その事実を確認して、改めて感心したり、容認はするものの、多少の相反す

「本居学の呪縛」から解放

中 国 風 の 寺 院 に 感 心

る感情を抱く時に使う。おそらくは前者の意だろうが、本居学へのこだわりもそこにうががわれる。

ふ中、中国風を嫌う本居学の影響で、かつてなおざりにしか見なかつた宇治黄檗山(おうばくさん)万福寺を詣で、

しかし2年後の「班鳩日記」(天保7年(1836))には、本居

学への激越な言葉がある。

その年2月25日から4月25日まで、法隆寺が「古くより伝わり来る靈宝あまたあるを」(略)ひろく人に見する」(菱岡他編「小津久足紀行集(一)」「神道資料叢刊14」2015.3.)と聞いて、

と、自身の本居学一辺倒から脱して、唐様の美も認める風になつたと書く。極め付きは吉野の水分(み

まず近江路から大阪難波の芝居を見て京に上り、名所を巡って再び大阪に戻り、河内から吉野の花の後、眼目である法隆寺の宝物を見るとところでクライマックスとなる。

紀行文はますます伸びやかに、しかも簡潔明快。久足の個性の表現述も多く、リズミカルに運ぶ。この「やちまた」てふ(という)書は、わが師なる人の著されたるなれど、おのれは仮にも(決して)信じることなく、常に忌み嫌つこと甚だしく、近き頃本居風(本居流の学問)を尊とみ思わざるは尊敬しないのは、これらより(この著書などから)きさしたるなり。

(同47頁)

【柏木隆雄さん(78)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名准教授。著書に「バルザック詳説」、「暗黒事件」など。

「さりとて師の恩を忘れたるにはあらねど」と弁解しているが、本居学の学統を忠実に守つてきた久足が、師とその学問を尊ばなくなつたのはなぜか? 昨年6月の連載第45回での問い合わせに、遅まきながらようやく到達することになる。

(毎週土曜掲載)

くまり)神社で桜を見ての文章だ。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

(15) フランス文学者

柏木 隆雄

「花鳥日記」に続く小津久足31歳の紀行文「花鳥日記」(天保五年へ1834)は、その書き出し、旅をつくるものと書いたるは、さりがたきことにて(そんなことはあり得なくて)心ゆかぬ折の旅のことにしてあらめ。野山の眺め、花鳥の哀れを旨と志す旅ばかり、心ゆくものは又(また)世に類いあらじを、と心定めたるえせもの(取るに足らぬやつ)あり。(藝岡書司「小津久足『花鳥日記』について・付翻刻」10頁)。九州大学学術リポジトリ、所蔵。表記は読みやすいように変えた。)

昨日の雨でいささか盛り過ぎたれど、名高き滝桜などは盛りにて、いと面白し。(略) 中には酔い泣きしつつ大声あげて歌い席(のの)痛く(愚かで苦々しく)、こぶし振り上げて打たまほしまで(殴

「花染白記」に続く小津久足31歳の紀行文「花鳥日記」(天保五年へ1834)は、その書き出し、旅をつくるものと書いたるは、さりがたきことにて(そんなことはあり得なくて)心ゆかぬ折の旅のことにしてあらめ。野山の眺め、花鳥の哀れを旨と志す旅ばかり、心ゆくものは又(また)世に類いあらじを、と心定めたるえせもの(取るに足らぬやつ)あり。(藝岡書司「小津久足『花鳥日記』について・付翻刻」10頁)。九州大学学術リポジトリ、所蔵。表記は読みやすいように変えた。)

とあって、それまでの紀行文記とは見違えるような伸びやかさを示す。

冒頭から「旅を憂きもの」とする中世以来の由緒ある文学的伝統を、そんなことはあり得ない、旅の楽しみは山の眺め、花鳥に心を寄せる」とこそあると断じて、過去の文学の約束事から一気に自由になり、わが身を「えせもの」と卑しんで見せながら、その実、自らの姿勢への自負を貢ぜる。

藝岡氏が久足紀行文の画期と指摘するように(同書8頁)、重しの取れた軽やかな文体で、先の貞原益軒的な道案内や地誌の記述を打ち捨て、旅する喜びを率直に記す。例えば3月12日の風山の記事。

と、花に興じ、醉客の狼藉(ろうぜき)に腹を立てる様など、不義、不正に対する潔癖な彼の性格をも素直に表して屈託がない。これこそ彼がたどり着いた紀行文の本領

つてやろうかと)思はる。中にも静かなる茶屋もとめて尻うちかけつつ花を見る。(同14頁)

以下、4首添えられる歌も、記述を説明的につなぐ彼の従来の日本記に見られる挿入歌と通って、行文の伸びやかさと見事に調和する。まさしく三十にして立つ、と

いう「論語」の章句のように、彼

が人格的にも学問的にも、一家の見識を備えた自觉を得た徵(しるし)と言えようか。「源氏物語」の紫式部にゆかりの深い石山寺、芭蕉の住した名残をとどめる幻住庵を訪(おとな)うあたり、例え

3月21日には大阪道頓の堀藤屋に泊まり、畠山角座で石川五右衛門が南禅寺山門から都を睥睨(へいげい)する「山門五三桐」を見た。珍しくない芝居ながら、「役者はいと良き娘りにて、さるかたなる(しつかりとした)見もの也(なり)」(同20頁)とすつかり余裕の観客ぶりを見せる。

この落ち着いた風格は、どこか

来るのだろう。(毎週土曜掲載)

ごときひが者(ヒトスル)のひねくれた人間(ヒト)は、すずくに「なんといふこともなく、住まほしく覚ゆる所(スル)」(同、12頁)

従来の紀行と比べ 優れた文人の風格

「花鳥日記」は楽しげ

だろう。この文章に続く

たぐひなき花も風(花を落とす風と地名などを懸ける)の名を辛(つら)き浮き世のさが(習わしの意と地名の嵯峨をかける)はかくこそありなむ

が人格的にも学問的にも、一家の見識を備えた自觉を得た徵(しるし)と言えようか。「源氏物語」の紫式部にゆかりの深い石山寺、芭蕉の住した名残をとどめる幻住庵を訪(おとな)うあたり、例え

この庵の跡を見るに、思いしにはやう(様)変わりて、湖(琵琶湖のこと)などはいささかも見えず。何の見るめなき(見るこころのない)山なり。されど、かく里近き山には似げなく、いと母離れたる閑情の(もの静かな)地にして、己が



「花鳥日記」版本表紙 (三重県立図書館蔵)

【柏木隆雄さん (78) 略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著『暗黒事件』など」。

松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

(74)

フランス文学者

柏木 隆雄

小津久足の「花染日記」(1831年)は上冊と下冊でその文体に相違があると述べたが、上冊にはさらに特徴的なことがある。それは訪れる神社、仏閣についての簡潔ながら漏れの少ない記述だ。例えば、開基冒頭、三渡橋を過ぎて、「小川村にいたる。式に見えたる壱志郡小川神社は村の中におはします」とあり、伊勢路村に入ると、「大森明神とまつす神のみやしろ、道の左に立たせ給(たま)へり。こは式に大村神社と見える御社の御事を、かく言ひたがへたる(言い間違えた)ものなるべし」といった記述が目付く。「式」とあるのは延喜5年(9

05)醍醐天皇が藤原忠平(その兄時平とともに菅原道真のライバル)に編纂(へんさん)させた「延喜式」(全50巻)で、この律令施行細則の集大成は、幸いなことにほぼ完全に残っているため、平安以降の行事、神社の縁起を知るよりどころとなつた。江戸時代には版本も出て注釈や研究も行われ、中でも神祇(じんぎ)に関わる卷

1~10に神道家や国学者の関心が集まり、賀茂真淵「祝詞(のりと)考」などの著作も生まれている。

「延喜式」人名帳の注釈 志して「柳桜日記」の旅

菱岡憲司「大才子小津久足」(中公叢書、2023年)によれば、久足も「延喜式」神名帳の注釈をして、文政11年(1828)2月から4月にかけて、京、大阪、河内、和泉を巡る旅に出で、「柳桜日記」を著している(同書87頁)。菱岡氏が引く24代仁賢天皇陵とされる藤井寺のボケ山古墳を訪れた際の記述だ。



菱岡憲司
大才子 小津久足
(中公叢書、2023)

「花染日記」で宣長に決別

とあるように、「延喜式」を参照しつつ古跡をたどり、本居宣長(古事記伝)の記載を確認しながら、その当否をわが目で検証しているのがよく分かる。菱岡氏はこの頃

わっている。例えば歐傍村以下の神社についての記述、

この村に産神(うぶがみ)御社おはしますは、式に見えたる歐傍山口坐(うねびやまぐちにます)神社にはあらじか。(略)むかし半佐(むさ)といひしきの所にて、

式に見えたる高市郡半佐坐(たけみちぐんむさにます)神社は、この二社のうちに疑ひなし。(菱岡他編「小津久足紀行文集1」、34頁)

と、「花染日記」では宣長の説もうべなう余裕も見せながら、「延喜式」研究の成果を矢継ぎ早に示していく。上冊において詣でる社寺について「延喜式」を細かに検証しつつ、宣長の「菅笠日記」を想起させる叙情的な筆致、下冊では一転して貝原益軒の地誌に重きを置く筆法を踏むところに、宣長の人と又への哀惜と、同時に宣長学への誤解(けつべつ)のあいさつをしているかのように思われる。

(毎週土曜掲載)

この塚穴を式に見えたる身狭桃花鳥坂上陵(むさのつきさかのえのみさきぎ)ならむと、本居翁の言はれるはさもあるべし(なるほどそのとおりだ)

から宣長の学問、「実地調査をせずに書物のみによつて考察する姿勢」に久足が疑いの目を向け始めだとする(同書89頁)。

「柳桜日記」に見る「延喜式」は、まだやと宣長説との比較検討は、まだやや遠慮がちな物言いだが、3年後

の「花染日記」では語調が変化し、断固として自信ある文体に変

て、また八木近くにある塚穴につい

【柏木隆雄さん(78歳歿)
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安二郎

(73)

フランス文学者

柏木 隆雄

日本における民俗学の祖とされる柳田国男は、元禄の頃まで「都登りと江戸見物」だった紀行が、貞原益軒になつて道中の田園の事物にも目が向けられるようになり、「和洲巡覽記」は元禄5年(1692)益軒63歳での「ほとんど最終の漫遊と言つてよい」が、「これが一種の清新味を供して」「以後世の好みがこうした紀行に向かつた」と述べている(帝國文庫「紀行文集」1930年刊解題)。

実際、「和洲巡覽記」(元禄9年¹⁶⁹⁶)刊を見ると、○春日野 広し。林多く鹿多し。八景のひとつ也(なり)。



長の書き入
れのある「大
和めぐりの
記」(「和洲巡
覽記」、本居宣
長記念館蔵)

○野守の鏡 春日へ行く道の南、貝原のおぢが、見ぬもろこしにも驚原という所に有。のように、地名、名所が要領よく羅列され、折々に益軒の補足の文章が入る。写本でなく刊本であることも書の流布を促しただろう。本居宣長もこの版本に書き入れをしていることからも、旅の道しるべとして重視されたことが分かる。

旅において、久足もこの書を携帯していたに違いない。吉野の桜の美しさを目の当たりにした小津久足が、益軒の「やまとには言うに及ばず、おそらくは見ぬもろこし(まだ見たことのない中国)にもあらじとぞ思ふ」とある「和洲巡覽記」の語の一部を引いて、

○野守の鏡 春日へ行く道の南、貝原のおぢが、見ぬもろこしにも驚原という所に有。あらじとぞ思ふ」と言ひたるゝと、さるかたに心にくけれ(なるほどそれはとも書の流布を促しただろう。本居宣長もこの版本に書き入れをしていることからも、旅の道しるべとして重視されたことが分かる。

久足も携帯「和洲巡覽記」

こしが出でくるのだろう。

「花染日記」(1831年)に記す

旅において、久足もこの書を携帯していたに違いない。吉野の桜の美しさを目の当たりにした小津久足が、益軒の「やまとには言うに及ばず、おそらくは見ぬもろこし(まだ見たことのない中国)にもあらじとぞ思ふ」とある「和洲巡覽記」の語の一部を引いて、

「ばかだと人に示す札」の説(そしり)免れるべし。

と下手な漢詩を作る愚かさを諭す一節を「見ぬもろこし」の語から想起させようとしたのであるまいか。

漢文書の宣長が閉口しながらも歌を一首渡して別れたところ、夜になって宿の方に和歌を2首届けて寄こす。(連載第19回参照)

明治15年(1882)西洋の詩

未踏の国を見たかのように日本と書いて、益軒の文が明治の青年にも影響していることを示すが、時代の近い久足はいつもそう同感するところが多かったに違いない。

未踏の国を見たかのように日本と比べる紋切り型の表現を、益軒の語を引くことによって揶揄(やゆ)しながら、宣長の漢字嫌いを示す「花染日記」の逸話を想起させ、漢詩ならぬ自作の桜の和歌を5首並べて見せる久足の「風流人」としての自負を、そこに見ることができる。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(78)略歴】
1944(昭和19年)、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著『暗黒事件』など。

訓」(1710年)で、

つたなき詞(の)ば)をもつて、なまじいに不要なる」と言い出す(「がめ)を要せず、と。誠に益軒氏は、みずからはいみじく(自分では優れている)と思へど、詩歌を知られる人の見る目も恥ずかしく、顔は、みずからはいみじく(自分では優れている)と思へど、詩歌を知られる人の見る目も恥ずかしく、顔

貝原益軒いわく、我がはただ和歌をもつてその志を言い、上を述べるべし。拙詩を作つて詠痴符の説(「がめ)を要せず、と。誠に益軒氏の言(げん)の如(ご)とし。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎

(72) フランス文学者

柏木 隆雄

近刊の菱岡憲司「大才人小津久足」(中公叢書、2023年)によれば、久足の紀行文に大きな影響を与えたものは、宣長の『萱草日記』(1630~1714年の紀行文があるという)と『養生訓』(1712年)や『女大字』(1733年、ただしこれは益軒に仮託した書)で知られる益軒は、廿年まで「損軒」、晩年は「益軒」と号して、儒学のみならず博物学や福岡藩史の編さんなど多くの書を著述。芥川龍之介も遺作「侏儒(しゆじゆ)の言葉」(1923~1927年)で、旅の船中で若い書生と出会った益軒のエピソードを紹

介しているように、彼は日本の各地を巡歴し、詳細な記録を残した。

上赤坂と下赤坂の間、十町ばかりあり。其(その)間に山の井村あり。此處(ここ)に楠木正成の住せし宅のあとあり。今は田地となり、楠屋敷と号す。黒塚小き塚有。山の井の北にあり。國見の西に東坂して、金剛山へのぼる道あり。民家あり。これ又(また)、高き所也(なり)。

ここよりはいと近く見ゆ。(花染日記下巻)

吉野の桜を見て、19歳の紀行「よしの山裏(やまづと)」(文政5年~1822)での幼い体験をほろ苦くも思い出しながらあらため5首を示した後の文章だ。

益軒の「己巳紀行」と
久足の「花染日記」

その一つである「己巳(きし)紀行」(1692年)は、岩波書店の新古典文学大系第98巻(1991年刊)で底本とされた京都大学工学部建築科蔵の写本には、「西莊文庫」の印があるというから、(板坂煙子の解題同書104頁)、その所有者である小津久足が目を通したこととは確かだ。

己巳(つちのどみ)の元禄2年(1689)に益軒が丹波丹後、若狭、さらに奈良、和歌山を巡った紀行を、奈良や和歌山に親しい久足は愛読したに違いない。

その年益軒は60歳。「己巳紀行」の中に収められた河内、和泉、紀伊の井村といふにいたりて楠公の屋敷跡というを見る。大將軍の御社おはしまして、老木一本立てる二間四方の地也。(略)

と記す。一方久足はどう書いているか。

山の井村といふにいたりて楠公の屋敷跡というを見る。大將軍の御社おはしまして、老木一本立てる二間四方の地也。(略)

坂煙子が益軒の「南遊紀事」の文章を、「江戸の紀行文」(中公新書、2011年)で「感傷に流れず、正確に観察し、写実する」と評する言葉は、そのまま久足の文体にも当てはまるだろう。

久足が引く「貝原のおぢ」の言葉は、元禄9年(1696)に刊行された益軒の「和洲巡覽記」の一節にある。なぜ久足のこの文章が私の興味を引いたか。それは次回に説く。

(毎週土曜掲載)



岩波書店刊
「日本思想大系第34巻(1)
970所収 国版

実際に、本居の大人(うし)宣長の「萱草日記」の記述に寄り添うかに見える「花染日記」上巻の中にも、何度も「貝原のおぢ(老人への敬称)」が言及される。とりわけ興味深いのは、満開の

【柏木隆雄さん(78略歴)
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバ・ルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

フランス文学者

柏木 隆雄

〔菅笠日記〕に見る木居宣長の旅は、吉野の花を見た後、吉野川に沿うて西の道をたどり、畠傍(うねび)、香貝山を見て、三輪へと進む。それから初瀬、萩原までは往路と同じ、そこから多気の方角に折れ、北畠神社を経て伊勢寺、松坂へと至った。

〔花染日記〕上冊での小津久足の吉野以後の足跡は、宣長の往路であつた上市から多武峰(とうのみね)を訪ね、飛鳥、西の京へと進んで唐招提寺を見、興福寺、東大寺に頭で、さらに佐保川を渡つて奈良坂を経、木津川を船で渡つて山城の国に入る。天保2年(1831)2月28日未明に松坂を出

と、珍重に値する記録もある。久
坂に至るが、この間の記述は上
冊の吉野紀行より断続で、地名と
詣である寺社の記事で埋まる文字通
り「日記」の体裁となる。
時には大坂に到着の3月18日、
道頓堀の芝居を見て、



19世紀の道頓堀角座(『やそしま』第9号所載、肥田暁三所蔵図版)

吉野から飛鳥・京・大坂

を歩き、河内長野の觀心寺を経て紀州街道に入る。それこそ「ちまた（分かれ道）ある所を踏み迷ひて、あらぬ峰をよじ登りなどしつつ、（略）谷底にまろびや（転げでもして）落ちんとて、はかばかしくは足も進まず」といつた苦笑を重ねて、24日高野山到着。墓所や滝口入道の庵室などを見て橋本に宿を取る。翌日金剛山の麓に至り、萬城を経て再び大和に戻り、当麻寺から法隆寺を見て柏原、そして平野から再び天王寺に戻つての記事は、淡々と経巡った寺社の

跡部村には式（延喜式）に見え
たる跡部神社おはします。龜井村、
鞍作村などいふを過ぎ、柏原より
百町といふに平野にいたる。いと
良き里なり。大念仏寺といふ寺も
あり。河内の国はこの所を限りに
て、この里を離るれば攝津国也。

点描を連ねるのみで、上冊の「菅笠日記」をなぞる筆致とずいぶん違つて、いわば一種の旅案内を読む感さえある。

中村歌石衛門（おそかはの代田）
1788—1838年）の「道成
寺」を見て感心してゐる。
河内では御陵巡り
高野山経て天王寺へ

足の見た菊五郎は3代目（1784—1849年）だろう。この3年前の文政12年（1829）、江戸3座が火事で焼けたために巡業に出て、ちょうどこの時期娘婿の尾上菊枝と道頓堀で興行している。「ほかにはさしたる役者」はない、と書かれるのは、後に4代目菊五郎となる菊枝の名がまだ

河内では御陵巡り
高野山経て天王寺へ

といった類の記述が「花染日記」下冊にはしばしば見られる。」の変化はどこから来るのだろうか。それには手本とする別の紀行著作があるように思われる。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎

フランス文学者

柏木 隆雄

70

「花染日記」上巻(天保2年~1831)に見る久足の吉野の旅が、宣長の「菅笠日記」(享保7年~1722)に倣うのは、もとより松阪から吉野への道程が自ずから定まるに至る。久足は、やはり年少の頃から春庭の門に連なり、その父でも師でもある宣長の著作が尊ばれることもあるだろう。例えば、宣長の後醍醐天皇ゆかりの吉野水院での記述に、



御社は東向きてにて
三社たた
吉野水分
神社(井)
上直子さん
撮影)

のように、ほぼなぞつていて、近くに宣長の父が「子を求めて願を掛けた」という子守神社があり、父をしのぶ感動的な文章を宣長は書いているが(本連載第23、24)、久足も「すこしゆきて子守の御社に詣づ」と触れるが、

あるが、その数葉前の彼の文章に注意する必要がある。

その前夜、宿とした藏王門前の福知屋の娘が、ことし初めての節句だと「雛(ひな)をいとうはしく飾りたるは、山中に似つかはしからずいとおかし」として、みよし野はさすがに花の都にてひな(飾りの雛と鶴(ひな)のひなを掛ける)とも見えぬすさび(興にまかせる)ひと遊び事と掛け

と歌を添え、ありきたりのひな人

まへる。三はしらおはする。(「菅笠日記」) とあると、久足は開帳させて拝みたてまつるに、いと大きな御像三体おはしますが、(中略)その様いと恐ろしき御かほして、かた御足さきげ給へる御像なり。(「花染日記」)

とあつさりと済ませている。感傷におぼれず、淡々と旅の記録をつづついく久足の覚悟の文章でも喜式のこと)に見えたる吉野郡吉野水分神社なり。(「花染日記」)

宣長も歩いた吉野へ

これが分かる。むしろ宣長の冷静な学者ぶりに似ぬ心のたけをそぞろに述べる文章に比べて、久足は

そのことを極力避け、旅の記事に文章は、あたかも宣長の父を思う筆に相呼応している

形なのに目が留まったのは、おのが娘もことはじめての節句なれば、けふは家にてもかくのごとく雛祭りをなすらんといどなつかしくおぼゆるままの、心などひなるべくや。

すでに飛びいらんとする折は、先(ま)ず見る人の肝ぞきえいりぬる。さるをやがて底よりうかみ出で、苦しげもなく体おしのごひて(強く拭いて)のどかに衣取り来る様など世に珍しきわざにて、あやしき見ものなり。

宣長の文章と比べると、簡潔ながら描写のポイントを心得た筆法が鮮やかで、彼の紀行の手本が、必ずしも宣長だけでないことをつかがわせて興味深い。それは「花染日記」の下巻に至つて、もっと顕著になる。

(毎週十睡掲載)

簡潔ながら描写の ポイント心得た筆法

「菅笠日記」の記述と重なる部分はそればかりではない。例の宮瀬は土地の者が高さ10メートルもある

【柏木隆雄さん(78・略歴)
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

(69)

フランス文学者

柏木 隆雄

久足が生涯に記した旅の記録は19歳の歌紀行「よしのの山裏」(やまづと)（文政5年（1822）から始まって、53歳になって松阪近郊を散策した「梅の下風」（安政3年（1856））まで、全46冊が残されている。あたかも彼の詠草が14歳の「丁丑（ていちゅう）詠稿」（文化14年（1817））から54歳の「丁巳（ていし）詠稿」（安政4年（1857））まで全41冊が残されているのと軌を一にして、詠歌と紀行執筆に勤（いそ）んで遺憾が無い。「江戸の紀行」（中公新書）2011年の文

著者板垣燁子氏が教えた子の菱岡憲司氏に久足を「江戸紀行文界の馬琴」と説かれたのもうすかれる。（菱岡憲司「小津久足の文集」（ベリカン社、2016年、283頁）旅は吉野に始まって年々に近江、東、大阪、奈良、明石、和歌山など近畿一円、そして本店のある江戸、時には木曾路、水戸から仙台、松島まで足を伸ばした。全紀行のうちほぼ20篇（べん）が菱岡憲司氏を中心として翻刻されている（菱岡憲司氏「大才子小津久足」（中公選書（2023年）所載の参考文献参照）。私はその活字本を頼りに、久足の紀行の幾ばくかをうかがうにすぎないが、詠歌を主とする最初の紀行とほぼ同じ道をたどった10年後の「花栄日記」上下2冊（天保2年（1831））を読んで、その文事の進展を見る

どうあかざりし（いつまでも飽きることがない）その花のこと、ものをりごとに（何かにつけて思ひいでられて）（菱岡他編「神道資料叢刊14、小津久足紀行集1」。以下引用は適宜読みやすく改める。）と筆を起す久足は28歳。最初の「よしのの山裏」の末尾に歌を寄せた師本居宣長はその3年前に没し、今はその長男有郷

吉野への旅は、あるいは吉野の花への尽きせぬ思いばかりではなく、師の死後3年を迎えた感慨がその底にあったのではないか。先には供1人だったのが、今回は久世久庭、坂田茂稲2人を同行して、三渡橋で見送りの友人

なく、出詠しつづけた（足立卷一「やちまた」下、中公文庫、2015年、429頁）。吉野への旅は、あるいは吉野の花への尽きせぬ思いばかりではなく、師の死後3年を迎えた感慨がその底にあったのではないか。先には供1人だったのが、今回は久世久庭、坂田茂稲2人を同行して、三渡橋で見送りの友人

生涯に46冊の紀行残す

の後見人だ。春庭没して後の一周忌、三回忌と回忌ごとの鈴屋舎での歌会には律義に必ず出席して「実際に29年にわたって一回の休み

たちと別れ、宮古村の忘れ井に至つて、その由来を説くのは、亡き師の父である宣長の「菅笠日記」（1722年）の記述に倣うが、

宣長が「立ち寄りてたずね見るに、まことに古き井あり。」と実見するのに対して（本連載20、21参照）、久足は川の向こうにその井戸があるというが、「わが住むあたりにはほど近き名所なりほ又（また）いふにてもと、よそに見なしつつ、立ち寄りても見ず」と、宣長の文

の一首を示して、宣長の宮古村の段を鮮やかに切り取る手腕は、学者宣長と「風流」の人小津久足の相違を、旅の冒頭から浮き彫りにする。師春庭の面影をおそらくは旅の空に浮かべつつ、同時にその父の紀行文を久足は常に復唱していくに違いない。（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（78歳歿）】
1944（昭和19年）、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著『暗黒事件』など。

菱岡他編「神道資料叢刊14、小津久足紀行集1」（2013）

吉野への旅は
328歳

芳野の花の白雲をわけ見しは、
やくも十年ばかり隔たりぬれ

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

(68)

フランス文学者

柏木 隆雄

去年12月中旬、妻が「ボヴァリ夫人」(1856年)の著者フロベール誕生200年のシンポジウムで発表するのに付けて行つて1週間ほどパリに滞在した。会場はトロカデロ近くのシンガーリボリニヤック財団の建物の2階で、ミシンメーカーのシンガーファミリーの令嬢が、ボリニヤック公爵に嫁いで、その財と家柄を懸けて開いたサロンには小説家ブルーストやストラヴィンスキーなども訪れたという。エッフェル塔を間近に見上げる、外観は普通の19世紀のアパートマンだが、中に入ると豪華

絢爛(けんらん)、王宮のよくなしつらえが目を驚かせる。その帰國の前日、殿町の三姉が急逝したと次姉からメールが入つて茫然(ぼうぜん)自失した。連載を楽しみにしていた姉だが、そぞういえば10年ほど前、「心の中の松阪」を連載していた際にも次兄が亡くなっている。一昨年、長兄が数ヵ月のことだ。もちろん、いざれもたまたまそなつただけではあるが、何となく弟の不肖を背負つていったような気がする。

ウクライナ侵攻で 思いがけない体験

正月早々縁起でもない話だと叱られる。正月早々縯起でもない話だと叱られる。正月早々縯起でもない話だと叱..



シンガーリボリニヤック邸のシンポジウム会場

旅はdiscover

そして山の形、川のありよう、畑や小さな建物、無数に何もない山

地時間午後3時に離陸したため、窓外の明るい日差しの下に、高度1万㍍の狭い視界からアルプスの雪を頂いた山々、ゴビ砂漠、中国山地、韓国の山肌が、蛇行する川や森、建物、荒涼たる砂地、峠々（がが）たる岩肌を見せて展開するのを初めて目にしたのだった。

森鷗外は「大發見」(1910年)ながら「發見」したのだった。森鷗外は「大發見」(1910年)という短編で、發見はdiscover。なから「發見」したのだった。

小津久足19歳の吉野への最初の歌紀行「よしのの山裏(やまづと)」は、彼が吉野の桜を愛(め)で、多くの歌を詠みながら、三輪、初瀬の道をたどり、布引山を再び越えて松阪に戻る8日間の歌紀行である。以後彼は年々の旅を記録して53歳の「梅の下風」(1896年)まで46篇(へん)を残して、対する自分とは何か、自分を育ててきた故郷の風土とはいかなるものかを自省するに違いない。

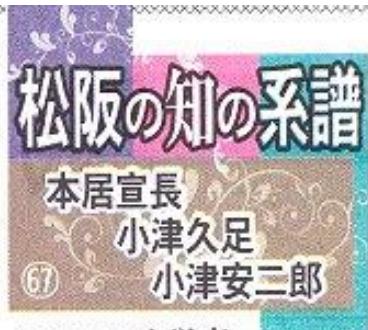
小津久足19歳の吉野への最初の歌紀行「よしのの山裏(やまづと)」は、彼が吉野の桜を愛(め)で、多くの歌を詠みながら、三輪、初瀬の道をたどり、布引山を再び越えて松阪に戻る8日間の歌紀行である。以後彼は年々の旅を記録して53歳の「梅の下風」(1896年)まで46篇(へん)を残して、対する自分とは何か、自分を育ててきた故郷の風土とはいかなるものかを自省するに違いない。

verすなわち「今まで有りながら、目に見えなかつたものを見えるようにする」とことだと定義しているが、まさしく私にとって、それぞれに風土の特異を眼下に示して、かつ連続している地上の光景は、「大發見」だった。

地域独特的風景を見続けながら、私はもし小津久足がこのパノラマを見たとしたら、どんな感慨だろうかと、ふと思つた。

確かに国が違えばその風土も文化も異なる。和辻哲郎の「風土」(1935年)でのモノスーン地帯論はいま修正を必要としようが、これまでのコースが、ウクライナ侵攻によって中央アジア経由となり、しかも定刻より随分遅れて現

【柏木隆雄さん (78歳)】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バーラツック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』」など。



本居宣長 小津久足 小津安三郎

(6)

フランス文学者

柏木 隆雄

前回の図版を松阪の文化団体「あいの風」刊行「菅笠日記」写真集(2002年)から選ばせていただいだ」とでもお分かりのようだ。吉野への最初の歌紀行「よしのの山裏」(やまづと)の旅程は、ちょうど50年前の「菅笠日記」に記された本居宣長のそれには重なる。

もちろん当時松坂から吉野へ行く道筋は、たいていそのコースだったには違いないが、久足の淨書の末尾に、師である本居宣長の歌、

みよしの花のほかにも」とかし



茶店からの
桜(あいの
会「菅笠
日記」写真
集[より])

あしたひきの山行きしかば山人の我
れに得しめし山つとぞこれ

このあまたさくらの春のやまづと
(吉野の桜の他、至る所にたくさん
春の桜の歌が山の土産としてある)

を載せていることからして、師の書を
父である宣長の「菅笠日記」を意識した道程になるのは当然のこと
だろう。久足が題名に用いた耳慣
れない「山裏」の語は、万葉集卷二
十の冒頭にある元正天皇の歌、

忠実だった若い久足が、その書を
父である宣長の「菅笠日記」を意識した道程になるのは当然のこと
だろう。久足が題名に用いた耳慣
れない「山裏」の語は、万葉集卷二
十の冒頭にある元正天皇の歌、

で、吉野山からの土産として久足
の歌を貰っている。自著の末尾に
師の一曲を詠うほど春庭の教えに
忠実だった若い久足が、その書を
父である宣長の「菅笠日記」を意識した道程になるのは当然のこと
だろう。久足が題名に用いた耳慣
れない「山裏」の語は、万葉集卷二
十の冒頭にある元正天皇の歌、

しかし彼の初の吉野紀行は、旅
程こそ同じながら、文章が主で歌
が従の「菅笠日記」とは異なり、歌
が主でそれに続く旅の記述の文章
をすべて字下げで示して、いわば

で、吉野山からの土産として久足
の歌を貰っている。自著の末尾に
師の一曲を詠うほど春庭の教えに
忠実だった若い久足が、その書を
父である宣長の「菅笠日記」を意識した道程になるのは当然のこと
だろう。久足が題名に用いた耳慣
れない「山裏」の語は、万葉集卷二
十の冒頭にある元正天皇の歌、

歌紀行「よしのの山裏」

歌の詞書(ことばがき)の態を成すように工夫しているところなど、ある意味きわめて意識的であるようと思われる。あるいは盲目の身で吉野の花見など夢のまた夢となつた春庭への配慮が、師の自分が負する歌を主とした紀行文となつたものか。

面白じとも、めでたしとも言わむ
は、なかなか愚かになりぬべし(言
葉にするのは愚かしい)。折よくか
かる盛りに会いぬるは、遠き國よ
り見に来つる甲斐(かい)ありて
いといとうれし。(読みやすいよう
に表記を改めている)

宣長が「一日千本」に異を唱えたのは、その呼称ばかりでなく、せっかく口取りを考えてやつてきた桜の間に、雲の掛かる盛りを過ぎた桜しか見えなかつたことにもまるだ

【柏木隆雄さん(78)略歴】
1944(昭和19年)、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「パルザック詳説」「翻訳にパルザック著『暗黒事件』」など。

店に来た久足の記述を見てみよう。

連載第23回に引いた宣長の文とこの文章とを比べると、一方はやや理屈っぽく、もう一方は無邪気

に見事な花を喜んでいる。久足の一文をよく読むと、宣長の当該箇所を十分に意識してのもののように

2

松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

(66) フランス文学者

柏木 隆雄

小津久足は文政5年(1822)2月21日(旧暦)、供1人を連れて松阪を出て吉野に向かった。まさかその半年後、播磨まで眼科の治療に出掛けていた5代目守良が、帰路の京都で客死するとは思ひもよらぬ久足は、旅中の印象をつづって「よしのの山裏(やまづと)」と題した稿を残す。高倉・菱岡・河村編「神道資料叢刊14小津久足紀行集(一)、皇學館大學神道研究所、2013」による翻刻を読むと、冒頭から、咲花にこころをかけて旅衣(けふ)おもいたつみよしのの山(咲いて)い



伊勢地の宿(あいの会「普笠日記写真集」より)

いる花を楽しみに、旅衣を着て今日吉野山に行こうと思う)よしの山あまたのさくらわけみむとひとりいでたつ旅衣かな(吉野の多くの桜をそれぞれ見分けよう、一人旅支度する)

の3首が置かれ、紀行文より歌日記の称がふさわしい。統いて「三渡にて、けふは春ともなく(春には似合わぬ)風あらくふきて、いとさむし」と短い文が添えられて、

第1歌「こころをかけて旅衣」の「かけて」は、心と衣とに掛けり、「おもいたつみよしの」は思ひよしのの吉野の山に春べさく花をしみにとゆかくしよしも(吉野山も春になつたから、花をぜひ見るのが良かろう)

けふは又かすみわたりのそれならで、波たちさわぐ春風ぞふく(きょうは普通にかすみが一面に掛かるのではなく、三渡川の波が立つほどに吹く春風が激しい)

見に」と、散る「花を惜しみ」を掛ける。「ゆかくしよしも(行きたいものだ)」は、万葉集卷14所載の東歌に範を取った表現。「みよしの」から始まって「よし(良し)」が3回重ねられるのは、やはり万葉集にある天武天皇「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき入よく見つ」を思い起させる。

第4歌の「かすみわたり」の語は、源氏物語の「若紫」にあり、「はるかに霞(かす)みわたりの」は、「身良し」と「美吉野」を掛けた。第2歌の「さくらわけみむ」は、桜を見分けるのと山を踏み分けるを掛け、「ひとりいでたつ」は、これから出合うあまたの桜と孤身を対照させる。

数え19歳の旅の歌

い立つ」と、辰巳すなわち今の午前9時に出立したこと、「みよしの」は、「身良し」と「美吉野」を掛けた。第2歌の「さくらわけみむ」は、桜を見分けるのと山を踏み分けるを掛け、「ひとりいでたつ」は、これから出合うあまたの桜と孤身を対照させる。

15歳の詠草と比べて
技法、はるかに上達

第3首の「春べさく」は、「古集序」の「難波津に咲くやこの花冬籠(こも)り今は春べと咲くやこの花」の難波津を吉野に変え、「花をしみに」とは、「花を

技法がどれほど上達しているかよく理解できる。春庭の鈴屋舎での月次(つきなみ)歌会の詠みぶりとは違って、なにか伸び伸びと氣楽に言葉遊びを楽しんでいる様子が、花を見るはるかな旅への期待を込めた弾んだ気持ちと合わせて、その暢達(ちょうたつ)な歌の中から浮かび上がって来る。

久足は谷戸(たんど)、大仰川(おのぎがわ)を渡り、「一本木、布引(ふひき)」に入つて伊勢地を経て名張に宿泊する。足の運びにつれて道筋の光景や事象を、いかにもすらすらと口に上(のぼ)せて作歌し、旅の印象や気付きを短く書き留めていく。いわば歌による旅の備忘録とも言おうか。彼の46編にも及ぶ紀行文の先駆けとなるのだ。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(78)略歴】

1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルサック詳説」、翻訳に「バルサック著『暗黒事件』など。

松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安二郎

(65)

フランス文学者

柏木 隆雄

江吉で千鶴（ほしか）を家業とする松阪商人湯浅屋小津家の歴史を記した6代目当主久足（ひさたる）の「家の昔がたり」に、13歳の彼が父と小津別家の後家せいとの再婚に強く反対した。あるのは、久足が彼女に思いを寄せていたからではないか。その憶測を確かめようと、久足が深く打ち込んだ和歌の中にその痕跡を探つてみた。

小津久足「家の昔がたり」引用箇所
〔『雅俗研究叢書3』資料集付載〕

くことは至難の業だ。活字翻刻のある15歳と44歳の作歌の中に、彼の囁された恋の影を見て、その証

な心情の発現は卑しまれて、作者の機知の鋭さを示す場合を除いて、古歌の例に沿いながら、読み手の知識を頼りにあからさまには表現せず、それとなく意を伝えるのを良しとしたから、久足の「恋」を歌つたものでも、その伝統に則した形で歌われ、恋の相手は特定されない。それに彼の7

連載第55回で述べた通り、小津家3代目理香（まさか）の実子である5代目守良が23歳で逝去、その後の1ヶ月後の文政5年（1822）

「風流を好む」と自身評す

9月、あたかも久足の父徒好（ともよし）が理香の長男守良の成人まで4代目として一時期家督を継いだように、守良の遺児虎吉が成人するまでの当座、久足は19歳で臨時の家督を継いで6代目与右衛門となつた。ところがその虎吉もわずか7歳で痘瘡（とうそう）で亡くなり、彼は名実ともに湯浅屋を背負つて商いの道にいそしまねばならなくなる。

「家の昔がたり」には、久足が慎重に、時に大胆に湯浅屋の身代を守り伝える様が詳しく記されて、たとえば文政12年（1829）

の江戸大火の際に小網町の本店が焼けたのを、新たに普請するものの、天保5年（1834）また火災に遭い、かつて父徒好が「江戸市中よりして、江戸外の深川にうつること、甚だ不承知」（久足「家の昔がたり」）だったのを、父が既に物故していたこともあり、江戸初期には新開地でやがて材木、

干鶴、メ粕（しめかす）などの商品保管の場となり、取引地でもあつた深川に移転を決断、湯浅屋の土台を搖るぎないものにすることになる。

「家の昔がたり」最後に歴代当主の好み列記

久足は「家の昔がたり」を終え
るに当たつて、歴代の当主たちの好みなどを列挙して「大円居士（2代目）は釣りをこのまれしよし。道秀居士（3代目）は相場を好み、淨謙居士（4代目、すなわち久足の

倒を言うのだろう。
商人としての久足の面目は、子弟へ示した家訓「非なるべし（多分間違つてゐるだろうが）」と題した書に明らかだが、風流人としての側面は、作歌に加えて江戸期第一の量を誇る紀行文に表れるところとなる。（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（78）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、「バルザック著『暗黒事件』など。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

フランス文學者

柏木 隆雄

アーティスト

「……」
「……」

ナの花を見るにつけて思い出
と解せようが、第2首の「ぼ
きすなほ音せん ふるにれ
の橘花咲きにけり」も、「ひ
び巣を離れたホトトギスも、
つたところにタチバナが咲い
鳴きもしように（音せん、と
るを掛けて）、恋人は訪れる
がない」とあり、さらに3首

歌の約束事の一つとして、タチバナの余音と恋の名残を掛けるものだが、連載第63回で紹介した春の「寄鶯恋(うぐいすによせるこい)」や夏の「寄蛙恋」と合わせて、今は遠い縁となってしまった女性を思い浮かべてのもの、と取れないことはない。

「へだて有りて」と恋の成就に障害があることを強調する。
同じ秋の「寄菊恋（きくによせるこい）」7首も、例えば、「猶（なお）たゆる霜のしらぎく折どりてうつろひ安き人に見せばや」（冷たい霜が降つてもそれに耐えて花を咲かせる白菊を手折つて、心変わりする人に見せたいものだ）な

をテーマにしたものが多いことに気付かされる。

小津久足44歳の「丁未(ていび)詠稿」(前出、菱岡憲司氏翻刻版)に記された歌稿には、「恋」を主題として、四季に従つて「…に寄せる恋」が歌われている。先に引いた夏の季で、蛙(かわづ)に寄せる恋のほかに、「寄橋恋(たちはなによせるこい)」3首がある。まずその一つ。

うつりがも 今はむかしと 袖ふ
りぬ人はよそにや 軒の立花(た
ちばな)

菱岡憲司「『丁未詠稿』翻刻
と解題(下)」(有明工業高等
専門学校紀要第47号所載)

(たて) ゾソウ人の心の秋かぜに
なげきのきりは吹きもはらさで
と、「そばに立つ（風が立つに掛け
ける）人の心に秋（飽き、と掛け
る）風が吹くが、憂る心の霧は払
つてくれない」と無情の恋を歌い、
第3首目の「つきあへぬ なげき
のきりも うき中は あやにひと
つのへだてとぞなる」も、「付き
合う」ともできず（会えず、とも
掛ける）、嘆く心に霧がかかるが、
こんな憂鬱な恋をしている時は、
そうした」とも妙に「一人を隔てて
しまう」とかごち、次の第4首も

「丁未詠稿」の後半では、「祈恋」「偽恋」など30首。そして「丁未詠稿」の後半では、恋を題としたほぼ30首が並べられるが、それらは「祈恋」から始まつて、「偽恋」「忘恋」「別恋」「恨恋」、「恨絶恋」、「喫不帰恋」（かえらざるをよぶこい）、「惜名恋」（なをおしむこい）、「隔簾恋」（すだれをへだっこい）など、いずれも恋を得た喜びを歌うものではなく、実らぬ恋、受け入れられぬ恋の歌が連続する。

四季それぞれの恋の歌

「丁未詠稿」の後半では
「祈恋」「偽恋」など30首

に興を感じていて、彼自身が「恋」を切実に感じて歌っているようには思えない。しかし、その中にも「恨む恋」が多いのは、あるいは少年時はかない慕情のトラウマがひそんでいたのではないか、と私は考えている。

【柏木峰雄さん（78）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

(每邊土暗挖載)

【柏木峰雄さん（78）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

(63)

フランス文学者

柏木 隆雄

である。

丁未は「ひのとひつじ」の弘化4年(1847)。その3年前には蘭学者高野長英が江戸大火の中、伝馬町の牢屋を賄賂、弘化2年、弘化3年には外国船が日本に頻繁に現れ、再び打ち払い令が出されるなど、世情騒然たる時代に差し掛かる。

文政元年の歌題として「遙恋(あうこい)」から「隠恋(へだつるこい)」まで作歌していくうちに、少年久足は「恋」の来し方行く末を心の内に整理していくのではなかろうか。

では久足の壮年期は「恋」をどのように歌つたか。初歩の歌をあげつらつて、彼の男盛りの歌を見るのは不公平というものだろう。久足44歳の「丁未(ていび

「ほるべき富ならぬ」とも身は安くうれしき春を又むかへり」と元定した生活を歌う久足は、その1年前父と継母せいとの結婚のいきさつを「家の昔がたり」に記したばかり。そのことを心に留め

て、「恋」と題する詠草を、季を追つて読み進むと、ます新春の「寄鶯恋(うぐいすによせるこい)」と題して、「うらめしやわが身ふるすとふるされて花にうつろふ谷の鶯」(恨めしい。古くなてしまつたと粗略に扱われて、あちこちの花を巡つて昔の古巣を探しまわる谷の鶯と私は同じだ)がある。

「ふるす」は「古いものとなす、
て、「恋」と題する詠草を、季を追つて読み進むと、ます新春の「寄鶯恋(うぐいすによせるこい)」と題して、「うらめしやわが身ふるすとふるされて花にうつろふ谷の鶯」(恨めしい。古くなてしまつたと粗略に扱われて、あちこちの花を巡つて昔の古巣を探しまわる谷の鶯と私は同じだ)がある。

て、「恋」と題する詠草を、季を追つて読み進むと、ます新春の「寄鶯恋(うぐいすによせるこい)」と題して、「うらめしやわが身ふるすとふるされて花にうつろふ谷の鶯」(恨めしい。古くなてしまつたと粗略に扱われて、あちこちの花を巡つて昔の古巣を探しまわる谷の鶯と私は同じだ)がある。

壮年期の久足の詠草

忘れる、捨てる」という意で、古巣と相手を「振る」の意を兼ね、「古今集」(巻19、雜体)の「鶯の去年(ごと)の宿りのふるすとや去年(ごと)の宿りのふるすとや我には人のつれなかららむ」(鶯の去年の古巣のように、古いく捨てるつもりである人は私につれない)とある歌を踏まえよう。久足は「ふるすとふるされて」と「ふる」の語を中年の男の矜持(きようじ)と自虐(じよく)をないまぜにして重ねる。あるいは婚後、星は自分の家、夜は後妻の家に帰る今は「い

少年期の歌と比べて
言葉運び断然滑らか



小津久足「丁未詠稿」表紙(二)
重原立図書館蔵

46、47号(2010、2011年)
所載の著者「小津久足『丁未詠稿』翻刻と解題」によつて読ん

【柏木隆雄さん(78略歴)
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「ルザック詳説」、翻訳に「ルザック著『暗黒事件』など。

古歌を踏まえるのは少年時と同じだが、言葉運びの滑らかさは見違えるばかりだ。ただ気持ちの吐露という点で、私は少年久足に軍配を上げたい。

(毎週土曜掲載)

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安三郎

フランス文学者

柏木隆雄

「文政元年詠草」にはあと「つ
恋の題詠がある。旧暦9月25日の
「別恋（わかるき）」8首、そ
して11月の「隔恋（へだつき）」
4首だ。

「別恋」は、第1歌「此暮（こ
のくれ）と契らざりせば 猶（な
お）いかに 今朝（けさ）の別れ
の悲しからまし（きょうの夕暮れ
に、との約束がなければ、今朝の
別れがなお悲しくなつたろう）」
から始まって、いわゆる「後朝（き
ぬぎぬ）の別れ」、妻問い合わせ枕
を交わした男女の朝の別れを歌
う。これもありふれた歌題であり、
かつ歌物語に頻出する。

例えば「鳥の音に 驚かされて
なくなくも オキ別れ行くしの
のめの空（朝早くの鳥の声で、は
や帰る時間と知らされて、泣く泣
く（鳴くと掛ける）床から起きて
(形身の衣を置くと掛ける)別れ
行く身に東の空が明け染めるのが
見える」とあるのは、人も知る
清少納言が「夜を」めて「鳥の空」
音は「はかるとも 世に逢坂（お
うさか）の関は許さじ」と歌つた
「枕草子」第129段の故事を踏
まえたと思われる。

「文政元年の詠草」
より（本居宣長記念館蔵）

(また会おうだけでも約束しておけば、それを慰めに今朝の別れを嘆くまいに)や第7歌「逢(あふことは「春庭は「は」を「を」と直している)又(また)いつとしもしら露(つゆ)の(知らぬと白露をかける)おき別れゆく今朝ぞ「ぞ」を「の」と直されている)悲しき「き」は「さと添削が入る)」そして第8歌の

「別るる恋」と「隔つ恋」

「朝露のおき別れゆく悲しさに涙乱るる袖の上かな」の3首は会うという約束もしていないから、ひとたび別れた後は、いつ会えることになるか分らない、それゆえにいつそう悲しさが増してつらい、というもので、これも私の勝手な推測ながら、父との結婚によって、素直には会えなくなつた新七の後家、そして繼母となつた人への思いを、それとなく踏んだもの、と思いたくなる。「詠草」の最後の恋の題「隔恋

男女の住まい隔てる
川を「坂内川」と見て

三十六

なき中の通い路」は、それほど遠くない距離を言い、また第4首「憂し辛(つら)し思(おも)い掛(か)けても往(む)き背(せ)山(さん)心(こころ)隔(は)つる中(なか)の瀧(たき)川(かわ)」とあるのは、文楽、歌舞伎の「妹背山女院訓」(明和8年初演)にある吉野川を挟んでの男女の恋の舞台を重ねさせて、恋の成就が困難を極ほることを歌う。

4首は、例えば「はかなしや通う
心の頼みだになくて隔つる仲の
契は（逢つてくれるという気持を
も定かでないので、恋が遠くな
ってしまった」とあるように、隔
てがあるために恋がかなわぬ、と
いう歌題に添うたものだ。

女の住まいを隔てる「瀧川」とある表現を、継母せいが住まう本町別家と久足が住む西町を隔てる「坂内川」と考えれば、「程なき中」に住まいながら、容易に意を通じることができなくなつた15歳の少年の隠された恋心が、歌に託して吐露されている、と解釈することもあるいは可能ではなかろうか。

「逢恋」「恨恋」「別恋」「隔恋」と、季にしたがつての作歌は、恋の始めから別離までの流れとなるが、それに従つて作歌を重ねながら、しょせんかなわぬ思慕を久足は断ち切つていたのではないか。歌題の選択にそんな久足への春庭の深い配慮を見るのは、あまりに小説的だと叱られるかもしけない。

【柏木隆雄さん（78）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、「翻訳にバルザック著『暗黒事件』」など。

(每週土曜掲載)

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

(61)

フランス文学者

柏木 隆雄

「文政元年詠草」の久足は、今なら中学生3年生。いささか早熟と言えようが、15歳元服の江戸時代はそれなりに大人の自覚があつただろう。

「詠草」には、さらに「恨恋(うらむこい)」が秋の季の中に5首、第57回に引いた「真葛(まくず)が原」の歌の他に、

恋衣かへしてぬれど夢にだにみ
えこぬひとはうらみられつつ
うき」とをえこそしのばねうらみ
てもいまはかひなき中のちぎりも

の歌は、初句の「恋衣」を春庭は「小夜(さよ)衣」と直して、あからさまな「恋」の文字を避けて次句の「夢」につなぎ、さらに「みえこぬひとは」の「人は」を「入ぞ」と強調、「うらみられつつ」の「つつ」と継続する語を「ける」と止めて歌の形を整えている。衣を裏返して寝れば恋人を夢に見る、という俗信を踏まえた小野小町の「いとせめて恋しき時はむばたま」の「夜の衣をかへしてぞ着る」(恋人に会えぬ時は、夢で見るよ)「う夜寝る時衣を裏返そう」(古今集一巻12、恋)とあるのを踏

うらみてもかひそなれことわ
りと ききもなされぬ中のちぎり
は
絶えはて今はみぬめのうらみて
も かひなきものか波のよるよる
が收められている。
「恋衣かへしてぬれど夢にだに」

15歳で詠んだ「恨む恋」

「文政元年詠草」の久足は、今なら中学生3年生。いささか早熟と言えようが、15歳元服の江戸時代はそれなりに大人の自覚があつただろう。

「詠草」には、さらに「恨恋(うらむこい)」が秋の季の中に5首、第57回に引いた「真葛(まくず)が原」の歌の他に、

の歌は、初句の「恋衣」を春庭は「小夜(さよ)衣」と直して、あからさまな「恋」の文字を避けて次句の「夢」につなぎ、さらに「みえこぬひとは」の「人は」を「入ぞ」と強調、「うらみられつつ」の「つつ」と継続する語を「ける」と止めて歌の形を整えている。衣を裏返して寝れば恋人を夢に見る、という俗信を踏まえた小野小町の「いとせめて恋しき時はむばたま」の「夜の衣をかへしてぞ着る」(恋人に会えぬ時は、夢で見るよ)「う夜寝る時衣を裏返そう」(古今集一巻12、恋)とあるのを踏

てかへりし波のなつりに」と光源氏に恨みを述べた歌を、久足は「あいとうに、その人の心の裏が見える(恨みに思つてしまふ、を掛け)」としたのだ。

また「うき」とを…」は、「意を得ない辛(つら)い気持ちをどうして堪える」ことができようか、せつかの約束も意味がなくなつたのだから」と歌い、「うらみて

まえで、久足は夢にさえ出てこないところに、その人の心の裏が見えた(恨みに思つてしまふ、を掛け)」としたのだと、恨んでみても仕方がない。それが当然だと、自分の言いかつも聞かずに約束は破られてしまつたのだから」とあつて、恋を得ぬ恨み言が連なる。

源氏物語の歌踏まえ 若い率直な心を表現

最後の「絶えはて…」の歌は、『源氏物語』紅葉賀(もみじのが)で、光源氏と頭中将(とうのちゆうじよう)の二人に言い寄つて報われない年配の宮女源典侍(げんのないしのすけ)が「うらみてもかひなき」たちかさね引き

真葛か原のうらみられつつ
(冷たい秋)・
1歌「秋風の
ひとのこころ
にうちそめて
真葛か原のう
らみられつつ
(冷たい秋)・
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「ルザック著『暗黒事件』など。

【柏木隆雄さん(78)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「ルザック著『暗黒事件』など。

きとかける)風が恋人の心変わりを説いて、野原の蔓の葉の裏、その心の裏を見る)ことになつた)も、「新古今集」(巻11、恋一)の慈円の歌「わが恋は松を時雨の染めかねて、真葛が原に風さわぐなり」によるように、當時にあって、それを踏まえて、たとえ初心者であれ、若年であれば、さまざまに題詠を人並みに読めることが上の例でも分かろうが、それにしても、春ひなきものか」を「かひこそなけれ」と強調して、歌としての韻を整えさせたが、「かひなきものか」は若い久足の率直な訴えをよく表しているように思われる。

「恨恋」の第1歌「秋風のひとのこころにうちそめて真葛か原のうらみられつつき上がるつてくるような気がする」として、彼の歌作におのづから浮き上がりてくるような気がする。(毎週土曜掲載)